

第3学年 Unit 6 ALPHABET

～オリジナルニックネームタグを作って、ALTや友だちともっとなかよくなろう！～

1 本実践で育てたい子どもの姿と題材について

本学級の子どもたちは、英語のみならず、他言語に対しても興味をもち、たのしんでコミュニケーションを図ろうとする姿が見られる。また、外国語の言語や文化に触れていく活動を通して、その経験から少しずつ自分の気持ちや考えを相手に伝えることの喜びやたのしさも感じることができ、さらに英語表現を求め、やりとりの表現を知りたい、使ってみたいという思いをもっている。しかし、新しい言語を学習する喜びを感じてはいるものの、自分たちの身の回りにある外国語の言語そのものや文化に目を向ける様子はあまり見ることができていない。

そこで、本単元では、導入場面でアルファベットという文字に触れる活動を設定する。教室や校舎の中からアルファベットを探すことで、子どもたちの身の回りには活字体の大文字で表されているものが多くあることに気付くことができるようにする。子どもたちは、大文字にはいくつも種類があること、様々な形があること、異なる読み方があることなどに気付いていくだろう。そうして、アルファベットの読み方や形に慣れ親しんでいく中で、ALTが自分たちの名前をまだ覚えることができていないという事実に出合う場を設定する。そうすることで「自分たちの名前を分かってほしい」という思いを高め、その上で友達や教師に呼んでほしい名前（ニックネーム）を考えて、外国語活動の時間に使う、ネームタグを作るというゴールを設定する。このネームタグを作っていくにあたり、子どもたちはアルファベットの種類や読み方、形に触れることはもちろん、一緒に生活している学級の友達の名前に使われているアルファベットを知ることになる。それが、日本でよく使われる名前に使用されるアルファベットや、母音・子音の関係などに少しずつ気付いていくことにもつながり、文字への興味・関心を高めることができると思う。

本単元では文字への興味・関心を高めるために、アルファベットの形や読み方の特徴を自分なりに捉え、仲間分けをする活動を通して、まずは文字そのものに目を向けることができるようにする。その上で、子どもたちは仲間分けをしたお店に「カクカクショップ」や「まるまるショップ」など、自分で捉えた文字の特徴を表した名前を付け、その店の名前からネームタグを作る上で必要なアルファベットを推測していく。さらに、コミュニケーションを図る活動も大切にしたいため、店員と客になりきってやり取りをしながら、自分がほしいアルファベットをもらったり、友達が欲しがっているアルファベットを渡したりする活動を設定する。そうすることで、コミュニケーションを図りながら自分の名前で使われるアルファベットを知りつつ、友達の名前（ニックネーム）に使われるアルファベットを知ったり、それぞれの違いのよさ、おもしろさに気付いたりし、それが大文字の活字体の形や読み方の認識につながると考える。

ここでは外国語活動の時間に、より親しみをもって友達とコミュニケーションを図ることができるようにするために「友達や教師（ALT）に呼んでほしい名前」のネームタグを作ることとした。単元の終盤では、ネームタグ作りに使ったアルファベットを友達に紹介したり、実際に呼び合ったりすることで、自分の名前を伝えたり、友達が呼ばれた名前を知ったりすることも、コミュニケーションをたのしむという上では大切な活動であると思う。単元全体を通して、文字の形や読み方の認識をすることはもちろん、子どもたち同士の個性や考え方を尊重する、豊かな人間性を育むことにもつながると考え、この題材を設定した。

2 単元の構想

今回の実践では、次の2点をポイントとして単元を構想する。

- 単元導入で身の回りのアルファベットを探することで、自分の身の回りに大文字が使われていることを改めて気づき、興味関心を高めることができるようにする。
- 友達が出店しているお店の名前から自分が使いたいアルファベットがあるかどうかを推測し、繰り返しやり取りをすることで、コミュニケーションをたのしみながら形や読み方などの特徴を捉えることができるようにする。

3 研究の視点に沿った具体的取り組み

(1) 相手や目的を意識してコミュニケーションを図りたくなる題材と課題設定の在り方

本単元では、教室や校舎など普段使用する場所を探検したり、普段使っている道具などをよく見たりすることで、自分たちの身の回りにはたくさんのアルファベットがあるという気づきが生まれるような活動を取り入れる。そして、大文字の活字体に対して興味・関心が高まりつつあるとき、ALT が子どもたちの名前をまだ覚えていないという事実に出合う場面を設定する。その際、教師・ALT や学級の友達という相手意識を明確にした上で「自分が外国語活動の時間に呼んでほしい名前」を知ってもらうという、目的を共有する。また、ネームタグを作成する前に、自分が使いたいアルファベットを店の名前から推測し、使いたいアルファベットがその店にあるかどうかを伝えたり、尋ねたりする場を設定することで、コミュニケーションをたのしみながら大文字の読み方や形などの特徴に気づき、形を認識していくことができるようにする。大文字の種類や形、読み方などを学んでいく中で、単元の初め、そして単元の途中で常に、相手や目的を子どもたちとともに話し合ったり確認したりしながら進めていく。

(2) 見方・考え方を働かせ、対話を通してよりよいコミュニケーションを行うための手立て

本時では、アルファベットの読み方に困ったり、思い出せなかったりした際に、友達にアルファベットの形を手や体で表現したり、その形に似ている形で表したり、英単語の頭文字と結び付けて表したりする子どもの姿を目指したい。そのためには、単元の序盤で、大文字の形や英単語の頭文字などをはじめとする、子どもたち自身が表現したアルファベットの特徴を教室に掲示しておき、いつでも見返ることができるようにする。子どもたちはそれを見ながら、自分が必要としているアルファベットを探すやり取りを行う際の手がかりとしたり、友達から尋ねられたときに見返したりすることができるような環境を整備する。

(3) 学習内容と思考過程を自覚し、よりよいコミュニケーションに向かうための手立て

毎時間の振り返りでは、メタ的な振り返りと学習への動機付けを促すために、次の2つの工夫を行う。1つ目は、言語活動の後に、自他の表現の工夫やよさに気付く立ち止まりである。本単元では、“A”というアルファベットの形が分かっているにもかかわらず、読み方が分からなくなったときや、友達にうまく伝わらなかったときには「こんなときどうやったら伝わる？」と問い返す。そこで、ジェスチャーを使ったり“Apple”で使われている“ア”と読むもの「犬の耳に似ている形」と表現したりするなど、子どもたちがどうにかして伝えようとしている様子を全体で共有することで、工夫やよさに気付くことができるようにする。2つ目は、授業終末の記述による振り返りである。何に気を付けて表現を考えていったのか、やりとりをしたのか、気付いたことで変わったやりとりや表現があったかなど、思考過程を振り返ることで、よりよいコミュニケーションの在り方を自覚して人とかわかっていく力を育む。コミュニケーションという視点で振り返らせることで、母語でのやりとりともつなげ、言語を越えたコミュニケーションの学びを高めていくことができるようにする。